

《伊予の闘牛》 1945年
18.0 x 24.0 cm / 木版画



《畑の中の家》 1926年頃
21.5 x 29.5 cm / 鉛版画



「山の版画家」として知られる畦地が初めて大規模な展覧会で山の作品を発表したのは1937（昭和12）年のこと。この年の夏に軽井沢を訪れた彼は、初めて見た浅間山に深い感銘を受け、日本版画協会第6回展に『火山』を出品した。四国カルストや中央アルプスなど、日本の山々や自然をこよなく愛し、自らも山に登った畦地だけに、以降は山を制作の主題に定めるようになる。

1952（昭和27）年に開かれた

国画会秋季展の出展作に、初めて「山

男”の姿が現われる。畦地の個性的

な山男は好意的に迎えられ、翌年に

日本代表として参加した第2回サン

パウロ・ビエンナーレ、1956（昭

和31）年に招待出品した第4回スイ

ス・ルガノ国際版画ビエンナーレな

どの国際展の作品にも山男が登場。

広く海外からも受け入れられた。

作品には作者の手柄が現われると

よく言われるが、畦地の版画はやさ



《山湖のほとり》 1983年 / 29.0 x 39.3 cm / 木版画

しさに満ちあふれている。観る者はそこに癒しや心地よさを感じるだろう。主題である山や山男だけでなく、生あるもの全てに愛の眼差しを注いだ畦地梅太郎。『白い像』（083頁）に代表される「山の版画家」の诗情豊かな作品の数々は、今なお国内外の多くの人々を魅了し続けている。



あたたかな眼差しで
自然を描いた「山の版画家」。

畦地梅太郎の名前は知らなくても、愛らしい山男や雷鳥の姿、富士山や石鎚山などの険しくも包容力のある山相を表現した彼の版画を観たことのある方は多いだろう。美術ファンより、登山愛好家にとって近いアーティストだと言えるかもしれない。なぜなら、その作品は2014年（平成26）8月号以降、彼の死後10年以上が過ぎた今も老舗の登山専門誌『岳人』の表紙を飾り続けているのだから。

畦地梅太郎は1902（明治35）年、愛媛県北宇和郡二名村（現在の宇和島市三間町）に生まれた。16歳で故郷を離れた彼は、18歳の時に東京へ辿り着く。やがて油彩画の道具を買

大震災後に内閣印刷局で働き始める
と、仕事で使う鉛の板に絵柄を彫って鉛版画を作るようになる。版画の大家・平塚運一に作品を見せたところを激励され、1927（昭和2）年、25歳で初出品した日本創作版画協会展で初入選。本格的に版画の道に入り、3年後には第11回帝展出品、さらにその2年後には日本版画協会の会員に推挙されるなど、木版画家として順調に歩んでいった。1936（昭和11）年には愛媛県内の名所旧跡を描いた版画集『伊予風景』を制作。伊予の人たちのために企画された、この最初の作品集は限定30部という少数数だったこともあり、すぐに売り切れてしまったようだ。